

# 副詞「よく」と「잘/cal/」が表す意味について

— 共起する動きの性質と出来ばえのよきの述べ方に着目して

永谷直子

## ◆要旨

**本**稿は、日本語の副詞「よく」・韓国語の副詞「cal」について、共起する動きの性質の考察を通し、両者が表す意味の違いを明らかにすることを目的としたものである。共起する動きの性質に関し、「よく」は持続性、段階性をもつ動きに限られるのに対し、「cal」はそのような制限をもたないという違いがある。それは、「よく」が「状態」を形容するのに対し、「cal」が「動きがどう実現するか」といった「動きのあり方」を形容するという違いによるものである。このような違いは、「よく」・「cal」を用い、出来ばえのよさを述べる場合において、状態性述語文で述べるか、動詞文で述べるか、といった表現構造の違いに大きく関わるものである。

## ◆キーワード

よく、잘/cal/、共起する動き、出来ばえ

## ◆ABSTRACT

This study analyzed the difference between the Japanese adverb “yoku” and the Korean adverb “cal,” focusing on their co-occurring verbs. The verbs co-occurring with “yoku” have both the continuity and gradability. However, verbs occurring with “cal” do not have this restriction. Therefore, “yoku” modifies the state of the action and “cal” modifies how the action was completed. The difference is in the way of description in each language. In Japanese, when we describe the quality of the product, we use “yoku” focusing on the state of the product. In Korean, it is expressed by the verbal sentence using “cal,” focusing on how well the action was completed.

## ◆KEY WORDS

yoku, cal, co-occurring verbs, the quality of the product

## The Meaning of the Japanese “yoku” and Korean “cal”

Focusing on co-occurring verbs and description of the caused event’s quality

NAOKO NAGATANI

## 1 問題のありか

韓国語を母語とする日本語学習者（以下、学習者）には、以下のような、副詞「よく」を用いた文がしばしば見られる<sup>[註1]</sup>。これらの文が不自然であるのに対し、学習者は、(1) では「ちゃんと受け取った」という意味で、(2) では「ピアノが上手い」という意味で、「よく」を使用できると考えるようである。

- (1) \* メール、よく受け取りました。  
 (2) # Aさんはピアノをよく弾く。

学習者がこのような文を作るのは、「よく」が韓国語の副詞「잘/cal/」<sup>[註2]</sup>（以下、「cal」）に対応した表現だと考えることによるとと思われる。「cal」は、(3) aのように「十分に」といった意味を表す。この「十分に」といった意味は(3) bのように「よく」も表しうる。この点で「cal」と「よく」は類似しているといえる。

- (3) a. 잘알다/잘생각하다… [lit. 【cal】知る／【cal】考える…]  
 b. よく知っている／よく考える…

その一方で、「cal」と「よく」には違いがある。「よく」では不自然であった(1)(2)は、(1)'(2)'のように、韓国語では自然な文である。「cal」は、「ちゃんと」、「上手に」という意味も表し得るのである。

- (1)' 메일을 잘 받았어요. [lit. メールを【cal】受け取りました]  
 (2)' A씨는 피아노를 잘 친다. [lit. Aさんはピアノを【cal】弾く]

(1)(2)は、学習者が、(3)のような例から、「よく」は「cal」に対応すると考え、両表現の違いを把握しなかったために生じたものだと言えよう。これらの例は両表現の違いを考える必要性があることを示している。本稿では、こ

のような「よく」と「cal」の違いを、共起する動詞の性質の違いという観点から考える。

## 2 本考察の対象

本考察の対象を明らかにするため、「よく」、「cal」の用法を概観する。「よく」の用法に関し、森田(1980)は「困難な事柄を遂行したことに対する評価」(以下、評価)<sup>[註3]</sup>と「行為・作用のおこなわれ方の説明」に分ける。後者は、「行為・作用の完全さを表す場合」(以下、程度)と、「頻繁さを表す場合」(以下、頻度)とに分けられる。(4)は「評価」、(5)は「程度」、(6)は「頻度」の例である。

- (4) 子供一人でよく東京まで出て来られたね。  
 (5) 誤植がないかよく見てください。  
 (6) 彼はよく忘れ物をする。

次に、「cal」をみていく。「cal」は多義語であり、包括的な意味記述は管見の限り、見当たらない。辞書の記述として『朝鮮語大辞典』の例を挙げる。

表1 『朝鮮語大辞典』における「cal」

番号	意味記述 (( ) 内の数字は原文の項目番号) <sup>[註4]</sup>	例文／併記された日本語訳	よくとの置き換え
1	注意して (2)	잘보다. / よく見る。	○
2	詳しく (3)	잘 아는 사람 / よく知っている人	○
3	十分に (4)	잘 잤다. / よく寝た。	○
4	熱心に (7)	그는 일을 잘 한다. / 彼はよく働く。	○
5	積極的に (8)	그는 배는 안 먹어도 사과를 잘 먹는다. / 彼は梨は食べないけれど、りんごはよく食べる。	○
6	しばしば (6)	그곳에 잘 간다. / そこへよく行く。	○
7	上手に (1)	글씨를 잘 쓰다. / 字を上手に書く。	×
8	よいときに (5)	그비 참 잘 오는군. / この雨じつにいいときに(気持ちよく)降るな。	×
9	ちゃんと (9)	책을 잘 놓으시오. / 本をまっすぐ置きなさい。	×
10	(時間、日数が)十分に (13)	사흘은 잘 걸릴 일 / 三日は十分かかる仕事	×

併記された日本語訳を見る限り、1～6は日本語の「よく」に対応する。このうち1～5は「程度」、6は「頻度」の用法に対応すると考えられる。一方、7～10は「よく」に置き換えられない。

本稿は、共起する動詞の性質から、「よく」と「cal」の対応、及び、表す意味の違いを明らかにすることを目指す。なお、1節でみた誤用は、「よく」の用法のうち「程度」の用法において、「cal」との違いが十分に理解できていないために生じたものと考えられる。よって、以下の考察は「程度」の用法を中心に、「よく」と表記した場合、基本的に「程度」の用法を指すこととする。

### 3 「よく」と「cal」が共起する動詞の違い

3節では「よく」と「cal」が共起する動詞を考察し、両表現の違いを考える。佐野(2006)は「程度」の「よく」が共起する動詞の性質を詳細に記述しており、その特徴として「持続性」、「段階性」の2点を挙げる。以下、順に説明する。

「持続性」を持つ動きとは、一定の時間動きを継続することが可能な動きを指す。佐野(2006)は、動作動詞の場合、「よく」と共起するのは(7)(8)のような持続性を持つ動きであるとし、(9)「終える」のような「一時的な動き」は共起しないとする。1節で挙げた(1)で「メールをよく受け取りました」と言えないのも、「受け取る」が持続性を持たない動きであるためだと説明できよう。

- (7) よく食べる／よく寝る／よく遊ぶ
- (8) よく噛む／よく調べる／よく見る
- (9) \*準備を完璧にしたから、プレゼンはよく終えることができるだろう。

「段階性」を持つ動きとは、均質的な動き、または、漸次的な変化の過程を持つ動きであり、動きが加わることで、動きの量あるいは質が増す動きである。(7)は動きの量が増える動きであり<sup>[RE:5]</sup>、(8)は動きの質が高まる動きである。佐野(2006)の指す「質」の内実は明確ではないが、本稿ではこの「質的な高さ」を望ましい状態への接近の度合いと捉える。例えば(8)「噛む」は動きを加え

ることで「咀嚼の状態」が進み、「飲み込むのに十分な状態」という「望ましい状態」に近づく。この変化の過程が「質的な高まり」である。また、佐野(2006)は、量と質の違いとして、動きを持続する場合に、質の高まりを表す場合(例:よく噛む)は同一の客体に対する働きかけを表すのに対し、動きの量を表す場合(例:よく食べる)は別の対象に対する働きかけを表す点を挙げる。

佐野(2006)は、「よく」が共起するのはこのような段階性を持つ動きであるとしている。変化動詞の場合、「よく」と共起するのは、結果の状態を進展させる「ビンの蓋を閉める」のような動きであり、「病気が治る」のように変化の結果に進展がないものは段階性を持たず、共起できないとする。また、(10)の「着る」のような着脱動詞、(11)の「作る」のような生産動詞はこの段階性を持たないために、「よく」と共起できないとする。「着る」は、動きを加え続けた場合、着た状態を維持はするが、生じた変化の結果に進展はない。「作る」は、動きが均質的ではなく、動きが加わることで動きの質が高まるわけではない。以上のように、本稿も「よく」は「持続性」「段階性」を持つ動きと共起すると考える。

- (10) #彼は服をよく着る。
- (11) #彼はケーキをよく作る。

これを元に、「cal」と共起する動きの性質について、持続性を欠く動きである(9)′、段階性を欠く動きである(10)′(11)′を例に、考えてみよう。

- (9)′ 준비를 완벽히 했으니, 프리젠테이션을 잘 끝낼수 있을거야.  
[lit.準備を完璧にしたから、プレゼンを【cal】終えられるだろう]
- (10)′ 그는 잘 입는다. [lit.彼は【cal】着る]
- (11)′ 그는 케익을 잘 만든다. [lit.彼はケーキを【cal】作る]

「cal」は(9)「終える」、(10)「着る」、(11)「作る」と共起し、(9)′「滞りなく終える」、(10)′「着こなしがうまい」、(11)′「ケーキ作りが上手い」という意味を表す。「cal」は共起する動詞に持続性、段階性を要しないのである。

段階性を持たない動きについて述べ得るということは、裏返せば、「cal」が形容するのは、動きの量の多さや（動きが実現した）結果の状態ではなく、どのように動きが実現するかといった「実現のあり方」であると考えられる。「cal」は「実現のあり方」が望ましいことを表すことから (10)' (11)' は、着た／作ったあとの結果の状態が望ましいことまでも表すのである。

このように、「よく」と「cal」が共起する動詞の性質には違いがある。この違いを表2にまとめる。

表2 「よく」・「cal」が共起する動詞とその性質

		動詞例						
		見る	噛む	寝る	食べる	終える	着る	作る
性質	持続性	○	○	○	○	×	○	○
	段階性	○	○	○	○	×	×	×
とよく共起	よくの用法	動きの質の高さ		動きの量の多さ				
	よく	○	○	○	○	×	×	×
	cal	○	○	○	○	○	○	○

このような違いは、「よく」と「cal」が持続性・段階性を持つ動きと共起した場合には、意味解釈の違いを生じさせる。(12) (13) を見られたい。

(12) 彼はよく食べる。／그는 잘 먹는다. [lit. 彼は【cal】食べる。]

(13) 彼は酒をよく飲む。／그는 술을 잘 마신다. [lit. 彼は酒を【cal】飲む]

(12) (13) は持続性・段階性を持つ動きであり、「よく」は「食べる」「飲む」という動きの量の多さを表す。一方、韓国語で (12) (13) は「十分に食べる／飲む」という意味に加え、(12)「好き嫌いなく何でも食べる」、(13)「悪酔いせず、酒による失敗がない」という意味を表す。「cal」は持続性の有無に関わらず、動きを「ひとまとまり」に捉え、動きが望ましい形で実現するさまを形容するのである。このように、「よく」は動きの量や質の高まりを表し、「状態」を形容するのに対し、「cal」は「動きの実現のあり方」を形容する。この違いが共起する動詞の性質の違いとして現れるのだと考えられる。

## 4 日本語・韓国語の「出来ばえの述べ方」における違い

3節では、「よく」と「cal」が共起する動詞の性質を見、両者が表す意味の違いを明らかにした。この分析結果を元に、1で見た (14) (= (2)) で「よく」が「上手に」という意味を表し得ないという点について、考えてみたい。

(14)a. #Aさんはピアノをよく弾く。(= (2))

b. A씨는 피아노를 잘 친다. [lit. Aさんはピアノを【cal】弾く] (= (2)')

「ピアノを弾く」の「弾く」は持続性を持つが、その動きが持続することと、動きの結果の質とは連動しない。「よく」は「弾く」と共起して質の高まりを表すことができず、「上手だ」という意味を表せないのである。一方、「cal」は「動きの実現のあり方」を形容する。よって、(14)bはAが「弾く」という動きを望ましく実現させること、つまり「ピアノが上手い」ことを表すのである。

このように、「cal」は動きの様子を形容して出来ばえのよさを表しうるのに対して、「よく」ではそれができない。この違いは、発話時に認識した出来ばえのよさの述べる場合にも見られる。

(15) (アーティストが壁にペンキで絵を描いているのを見て)

a. #よく描くなあ。

b. 잘 그린다. [lit. 【cal】描くなあ]

「描く」は前述の「作る」同様、段階性を欠くため、「よく」は「描く」と共起して、「絵」の出来ばえのよさを表せない。一方、「cal」は、「描く」という動きが望ましく実現されていることを表す。作成に関わる動きに関し、韓国語では、動詞文で出来ばえのよさを表すことができるのに対し、日本語では「よく」で動きの様子を形容し、客体の出来ばえのよさを表すことはできないのである。

それでは、日本語では、出来ばえのよさを述べるのに、どのような表現構造を用いるのだろうか。日本語では、(15)は「上手だなあ」「うまいなあ」のよ

うに状態性述語文で述べるのが普通であろう。「よく」は、「状態」を形容するため、動作動詞の場合、動詞文で出来ばえのよさを表すことが出来ない<sup>[註6]</sup>。「よく」を用いて出来ばえのよさを表すことが出来るのは、状態性述語を用いた(15)'、(16)のような場合である。「cal」が動詞文で客体の出来を述べるのに対し、「よく」は状態性述語文で客体の出来を述べるのである。

(15)' よく描けているなあ。

(16) ことに、翔吾と耕次郎がからむところはみんななかなかよく書けている。  
(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』:LBg9\_00196)

(17) は髪を切った友人の髪型を褒める場面での発話である。この場合、日本語では、a-1のように「よく」で「切る」という動きの様子を形容することで髪型の出来ばえのよさを表すことはできない。「よく」を用いるのであれば、a-2のように、状態性述語で述べるのが自然であろう。韓国語ではb-2のように状態性述語を用いることも可能であるが、b-1のように動きの様子を形容することで、髪型の出来ばえについて述べる事が可能である。

(17)a-1. # (髪を) よく切ったね。

a-2. (髪) よく似合っているね。

b-1. 머리를 잘 잘랐네. [lit 髪を【cal】切ったね] (a-1.の韓国語訳)

b-2. 머리 잘 어울려. [lit 髪【cal】似合う] (a-2.の韓国語訳)

このように、「よく」が「状態」を、「cal」が「動きの実現のあり方」を形容するという違いは、出来ばえのよさの述べ方の違いとして表れる。日本語では客体の状態を形容するのに対し、韓国語では動きの様子を形容するのである。

## 5 おわりに

以上、「よく」と「cal」が共起する動詞の性質から両者が表す意味の違いを考察した。「よく」と「cal」が共起する動詞は、「持続性」、「段階性」に違い

がある。それは「よく」が「状態」を、「cal」が「動きの実現のあり方」を形容するという違いの表れであると言える。さらに、その違いは、出来ばえのよさを述べる際に、日本語では客体の状態について、韓国語では動きについて述べるという違いに関わる。「よく」と「cal」の語彙的な意味の違いは、両言語における「出来ばえの述べ方」という事象の捉え方の違いにも関わっていると見えよう。  
(相模女子大学)

### 注

[注1] …… 「頻度」「評価」の用法(後述)のみ可能な場合は#で表す。(2)は「頻度」の解釈は可能であるとし、#を付している。

[注2] …… 韓国語のローマ字表記は「Yale方式」に従う。

[注3] …… 「評価」とは、「よくぞ」で表し得る肯定的な評価と、「よくも」で表し得る否定的な評価の両方を含むものである。

[注4] …… 分析に合わせ、項目順序を変更している。なお、原文では13項目が挙げられているが、このうち原文での項目番号(10)の「無事に、元気に([cal] 있다; いる, [cal] 지내다; 過ごす)、(11)の「立派だ、きれいだ([cal] 생기다; 生じる)、(12)の「いい気味だ([cal] 되다; なる)は、「[cal]+V」の形で、見出し語となっていることから、一語化した表現と考え、考察の対象から除いた。

[注5] …… 「量的限定」は、「頻度」と連続している。例えば「子供たちは{a.一日中／b.夏の間／c.◇}外でよく遊ぶ。」において、aのように期間が短い場合は「量的限定」と解釈されやすく、cのように期間を区切らない場合は、「頻繁さ」と解釈されやすい。bはその中間的な例と言える。本稿では、一般的に一定期間内の動きとして想定されやすい例を「量的限定」としているが、「頻度」との明確な区別は、定義しがたいものである。

[注6] …… 可能動詞の場合「よく歌えたね」のように共起可能であるのも、可能動詞が状態性を帯びているためであろう。また、「よく(ぞ)書いたね」のように遂行自体を「評価」し、それが結果的に出来ばえのよさを述べる場合もある。ただし、これは「困難な事柄を遂行した」というニュアンスを含むため、年少者に対する褒めに偏る傾向も予想される。本稿はこのような「評価」の用法を扱っていないが、「程度」と連続しており、今後は考察の範囲を広げ検討する必要がある。

### 参考文献

大阪外国語大学朝鮮語研究室(1986)『朝鮮語大辞典』p1990. 角川書店

佐野由紀子 (2006) 「あり方に関わる副詞としての「よく」について」益岡隆志ほか (編)  
『日本語文法の新地平1 形態・叙述内容編』pp.157-177. くろしお出版  
森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』pp.1186-1189. 角川書店

---